

Development of a Drawing and Manual Arts Unit for Fostering Expressive Skills : Introductions that Enhance Interest

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩倉, 史佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026889

図画工作科における表現力育成を意識した 単元開発・実践とその評価

—興味・関心を引き出す導入の工夫を通して—

岩倉史佳

Development of a Drawing and Manual Arts Unit for Fostering Expressive Skills
: Introductions that Enhance Interest
Fumika IWAKURA

1. 問題の所在と研究の目的

A 市立 B 小学校における 1 年次の実習期間中、図画工作科の授業を参観させていただいた中で感じた問題意識を次の 3 点から述べる。1 つ目は、児童が表したいことを見つけたり、考えたりすることが苦手であるということである。2 つ目は、表したいことがある児童も、表したいことを表現するための表現技法がまだ身についておらず、どうやって表したらいいのか分からないということである。3 つ目は、児童が図画工作科の時間において、活動に対してあまり意欲がなく、仕方なく活動を行っている児童が半数くらいいるということである。

上記の 1 つ目と 2 つ目の問題意識は、児童が表したいことを見つけたり考えたりする力や、表したいことを表す力、つまり図画工作科における「表現力」がまだ身についていないと捉えることができる。また、3 つ目の問題意識は図画工作科における「興味・関心」が低いと捉えることができる。この「表現力」と「興味・関心」はお互い関連しており、表現力を高めることで、興味・関心を高めたり、興味・関心を高めることで表現力を高めたりすることができるという可能性を示している。

表現力を高める手立てとして、竹林地(1994)は、「児童にとって新鮮な経験で驚きのある『場』であるかについての検討が必要である」と述べている。竹林地が述べた『場』を、筆者は「導入」と捉えた。それは、児童が表したいと感じたり、やってみたいと思ったりする、やる気を引き出すためには、そのきっかけである、「仕掛け」(導入)が必要と考えたからである。導入に焦点を当てて先行研究を調べると、佐藤(2017)は、「子どもたちの『おもしろそう』『やってみよう』という《やる気スイッチ》が入り、主体的・自発的な造形表現活動が生まれる指導こそ、発想や構想の能力を育成する指導につながる」と考え、子どもの意欲と創造性を引き出す図画工作の導入について研究し、制作活動に熱中する主体的な子どもの姿を引き出した。これは、導入を工夫することで、児童のやる気を引き出し、発想や構想の能力を育てることができるという可能性を示している。

本研究では、図画工作科における導入を工夫し、興味・関心を引き出し、表現力を育成することを目的とする。興味・関心を引き出す導入をすると、意欲的に取り組むことになり、それが表現力に結び付くであろう。また、表現力につながる導入をすると、児童の表現力が育成できるだろう(図 1)。これらの仮説を、第 6 学年における図画工作科の 2 つの単元(実践 I 及び実践 II)を通して検証していく。

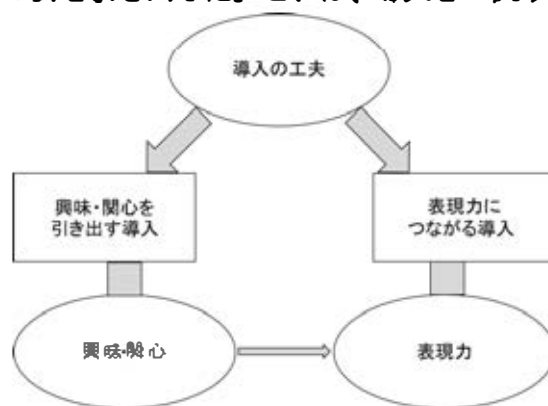


図 1 導入の工夫が興味・関心と表現力に及ぼす効果のモデル図

2. 研究の方法

本研究における導入とは、主に2つある。1つ目は単元全体における、第1時（第2時）を主とする導入であり、2つ目は各授業における導入である。単元全体における導入の工夫を主として行ったのは、実践Ⅰである。各授業における、前半の時間を主とする導入を主として行ったのは、実践Ⅱである。

本研究では、絵や立体・工作を通して育成する、「思考力、判断力、表現力等」と、「技能」を合わせたものを「表現力」と定義する。造形活動ではなく、絵や立体・工作を通して思考力、判断力、表現力等や技能を育てることを目指した理由は2つある。第1に、実習校の児童の実態として、絵画分野に対して苦手意識をもっているからである。第2に、造形遊びでは、教材の幅が広く、材料の違いで作品が大きく変わってしまうからである。

思考力、判断力、表現力等と技能は作品（制作過程、完成作品）等から測定する。ルーブリックの作成にあたっては、指導要領の目標及び内容にそって、各実践で育成する「思考力、判断力、表現力等」と「技能」に関連する、学習指導要領の目標とそれを詳細に解説した記述を抽出し、そこから評価項目を作成した。

本研究の思考力、判断力、表現力等では学習指導要領の中でとくに、「形や色、材料の特徴、構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、どのように主題を表すかについて考え」の部分が当てはまると考えた。技能では、「表現方法に応じて材料や用具を活用する」という部分と「表したいことに合わせて表し方を工夫して表す」という部分が当てはまると考えた。また、第5、6学年の目標（3）に示されている主体的ということ、本研究では興味・関心をもって活動に取り組むことであると考え、その中でも、「形や色に楽しく豊かに関わり、作りだす喜びを味わうことができるようにする」とことと捉えた。児童が活動自体に興味・関心をもって取り組むことができているのかを感想などのワークシートの記述を中心に測定する。

3 授業実践Ⅰ「想像のつばさを広げて」

（1）実践内容

実践Ⅰでは、6月に小学校6年生図画工作科単元「想像のつばさを広げて」を2学級(全55名)において全5時間行った。導入の工夫の中でも、特に第1時に焦点を当てた。なぜなら、「想像のつばさを広げて」という単元は、その名の通り、想像をすることが主となる。その中で、何も無い真っ白な状態から児童が想像するのではなく、何か材料があることで想像をしやすくし、想像を広げ、深めることができると感じたからである。

具体的な内容として、第1時では、マーブリングという技法を説明及び実演を通して紹介し、児童に体験させるということを中心として行った。マーブリングという技法を通してできる作品を「オリジナル画用紙」と名前をつけ、世界に1枚しかない画用紙を制作した。オリジナル画用紙は、短時間で作ることができる画用紙（作品）であり、児童は授業45分の中で複数枚完成することができる。オリジナル画用紙を主の材料とし、自分が作った材料から発想や構想を広げ、制作することができるようにした。マーブリングという技法は、児童にとって、初めて行う技法であり、興味・関心を引き出す工夫をした。

（2）結果・考察

実践Ⅰでは、思考力、判断力、表現力等の評価規準を、生まれ変わったらなりたい生き物と住

みたい所を組み合わせて考え、表し方を工夫しようとしているとした。特に、表したいものやことを強調できるように、オリジナル画用紙を活かして、色や形の組み合わせ方などを工夫しようとしているとした。そしてその結果、基準 A「オリジナル画用紙を活用し、表したいことを見つけ、特に表したいものが強調できるよう、色や形の組み合わせ方などを工夫して表そうとしている」は11人(23%)、基準 B「オリジナル画用紙を使って表したいことを見つけ、色や形を工夫して表そうとしている」は30人(61%)、基準 C「オリジナル画用紙を使って表そうとしている」は8人(16%)で、2学級合わせて49人(欠席6名)中41人の約84%がB以上であった。

例えば図2の作品例では、児童がオリジナル画用紙を活用し、気に入った色や形を見つけ、そこから表したい生き物を考えたり、制作したりすることができている様子がうかがえる。また、少し淡い色のオリジナル画用紙の周りには、黒や青などの色などの濃い色のクレヨンやコンテを使って塗ることで、表したい生き物を強調することができる。これらは、導入の時間に、オリジナル画用紙に描かれた色や偶然描かれた形から発想したり制作したりすることを、例を示して紹介したことで、児童が発想や制作をする上での支援につながったからだと考えられる。



図2 作品例

また技能の評価規準を、生まれ変わったらなりたい生き物と住みたい所を表すために、オリジナル画用紙以外の材料や用具（折り紙や色画用紙、絵の具、コンテ等）を選び、それらの材料や用具の効果を活かして、活用することができるとした。そしてその結果、基準 A「オリジナル画用紙以外の材料や用具を選び、それらの効果を考え、組み合わせて活用できる」は6人(12%)、基準 B「オリジナル画用紙以外の材料や用具を選び、それらを組み合わせて活用できる」は34人(70%)、基準 C「オリジナル画用紙以外の材料や用具を選び、活用できる」は9人(18%)で、2学級合わせて49人(欠席6名)中40人の約82%がB以上であった。

例えば図3の作品例では、児童がコンテを使って、濃淡をつけながら色をつけており、オリジナル画用紙以外の材料や用具を、効果を考えながら活用できている様子がうかがえる。これは、コンテの使い方を導入の時間に示し、新たな材料として紹介することで児童が使ってみたいという思いになったからだと考えられる。



図3 作品例

最後に興味・関心の評価規準を、オリジナル画用紙作りを通して、色や形について捉え、面白さを感じたり、新たな発見をしたりしようとしていると捉え、ループリックを作成し、第1時のワークシートの記述から興味・関心を測定した。そしてその結果、基準 A「オリジナル画用紙作りを通して、色及び形（混ぜ方）について捉え、それらから面白さを感じたり、新たな発見をしたりする具体的な記述がある」は13人(25%)、基準 B「オリジナル画用紙作りを通して、色もしくは形（混ぜ方）について捉え、それらから面白さを感じたり、新たな発見をしたりする記述がある」は38人(72%)、基準 C「オリジナル画用紙作りを通して、色もしくは形（混ぜ方）について捉えている記述がない」は2人(3%)

で、2学級合わせて53人(欠席2名)中51人の約96%がB以上であった。なお、基準Cの2人は無記入であった。

記述例として、「他の色の上に絵の具を重ねると花のようになっていたり、筆をつけて広がった色の形の円になっていた」や、「少し薄くなったり、濃くなったりしたけど、いろいろな形・色になったから、とてもきれいになってすごいと思った。家でもやってみたいです。」などがあり、多くの児童が初めて体験するマープリングを通して、色や形に着目していることや、活動に対して興味・関心をもっていることが分かる。多くの児童はマープリングという技法自体が初めてであり、それが児童の興味・関心を高めたといえる。

しかし、思考力、判断力、表現力等ではAが11人、技能ではAが6人しかいなかった。これは、表したいことを強調するために表現の仕方を工夫したり、材料や用具の効果を知って、その効果を活かしながら活用したりすることが難しかったためと考えられる。これらの児童は、第4時に第2～4時までの制作を振り返る時間を授業の最後に設け、オリジナル画用紙を使って作品を作ったことについての感想を書かせたところ、「意外と難しくオリジナル画用紙を作るときは楽しかったけど作品を作るのは難しかった」や、「羽を作るのにどの色をつけて作ればいいのか難しかった」などと述べていた。

以上のことを活かし、実践Ⅱでは、表したいことを強調するためには、どうしたらいいのか、どのような表現方法を用いればいいのかを、導入の際に児童が考えられるようにする必要があると感じた。また、材料や用具の効果の説明したり、効果的な使い方について一部紹介したりすることが必要であると感じた。加えて、実践Ⅰでは児童がオリジナル画用紙の使い方に見通しをもてず、「これどうやってこれから使うの?」と聞いてきた児童が多数いたことから、実践Ⅱでは、下描きの時間の始めと彩色の時間の始めの、各活動の始めの時間帯の導入に重きをおき、児童が見通しをもつことで更に興味・関心をもって取り組むことができるようにしようと考えた。

4. 授業実践Ⅱ「物語から広がる世界」

(1) 実践内容

実践Ⅱでは、9月から11月に小学校6年生図画工作科単元「物語から広がる世界」を2学級(全55名)において全9時間、表現分野及び鑑賞分野を行った。導入の工夫の中でも、特に下描きの始めの時間(第2時)と彩色の始めの時間(第5時)に焦点を当てた。各活動の始めの時間帯に導入の工夫を設けることで、下描きの際には構図の学びを活かしたり、彩色の際には寒色や暖色の学びを活かしたりすることができる。また、各活動の始めに学ぶことで、構図や色の学んだことをすぐに児童は自分の作品に活かすことができ、更に表現力が育成できると考えた。

具体的な内容として、第2時では、下描きの際に、全体及び正面(前)、横、後ろの角度を変えて撮った写真を見て、それぞれが与える印象を児童が全員で考えた。同じ人で同じポーズでも角度や位置を変えることで、伝わる印象が違うということに気づくようにした。伝わる印象の違いを考え、児童自身の作品に活かすことができるようにした。第5時では、彩色の際に、下絵は同じ熊であるが、寒色系と暖色系に色をわけて塗った2枚の絵の例を示し、それぞれが与える印象を児童が全員で考えた。同じ下絵でも色を変えることで、伝わる印象が違うということに気づくようにした。伝わる印象の違いを考え、児童自身の作品に活かすことができるようにした。

(2) 結果・考察

実践Ⅱでは、思考力、判断力、表現力等の評価規準を、表したい思いや事柄を考え、それらを表すための構図を発想しようとしているとした。特に正面や後ろ、横、全体など伝わり方を考え、表したいことにあった構図を、意図をもって選び、表そうとしているとした。そしてその結果、基準A「正面や後ろ、横、全体などの構図の違いによる伝わり方の違いを考え、表したい思いや事柄にあった構図を、意図をもって選び、表そうとしている」は21人(39%)、基準B「表したい思いや事柄にあった構図を選び、表そうとしている」は26人(48%)、基準C「表したい思いや事柄にあった構図については考えず、表そうとしている」は7人(13%)で、2学級合わせて54人(欠席1名)中47人の約87%がB以上であった。

例えば図4の作品例では、児童が第2時の導入での構図の学びを活かし、顔の表情や体の動きが強調される構図を選んでいることがうかがえる。児童の第4時の構図の工夫の記述からも、「全体アップの構図にしました。工夫した所は、ライオンの体を大きくしたり、顔を怖くした方がみんな驚くだろうから体を大きくしたり、顔を怖くしました。」と書かれていて、顔と体を大きくして強調したことがわかる。これらは、



図4 作品例

下描きの導入の時間帯である第2時に、全体2つ及び正面(前)、横、後ろの5枚の写真を提示し、同じポーズでも角度や位置を変えることで、伝わる印象が違うということに児童が気づき、構図を工夫しようと考え、制作をする上での支援につながったからだと考えられる。

また技能の評価規準を、表したい思いや事柄を表すために、寒色や暖色など色の与える影響について考え、色の効果を活かして、彩色することができるとした。そしてその結果、基準A「表したい思いや事柄を表すために色を選び、寒色や暖色などの色の効果を考え、彩色することができる」は11人(20%)、基準B「表したい思いや事柄を表すために色を選び、彩色することができる」は39人(72%)、基準C「表したい思いや事柄を表すために色を選ぶことはできないが、彩色することはできる」は4人(8%)で、2学級合わせて54人(欠席1名)中46人の約92%がB以上であった。

例えば図5の作品例では、児童が第5時の導入での色についての学びを活かし、伝えたいことを伝えるための色を選んでいることがうかがえる。寂しさを表すためには、どのような色がいいのか考え、彩色したことがわかる。これらは、彩色の導入の時間帯である第5時に、下絵は同じであるが、寒色系と暖色系に色をわけて塗った2枚の絵の例を提示し、同じ下絵でも色を変えることで、伝わる印象が違うということに児童が気づき、色を工夫しようと考え、制作をする上での支援につながったからだと考えられる。



図5 作品例

最後に興味・関心の評価規準を、本単元の学習内容(構図や彩色など)を踏まえ、それを活かしたり、発展的に試してみたりしようとしていると捉え、ループリックを作成し、第9時のワークシートの記述から興味・関心を測定した。そしてその結果、基準A「本単元で学習した構図や

彩色の技法を活かそうとしたり、試してみたりしようとしていることについての具体的な記述がある」は10人(21%)、基準B「本単元で学習した構図や彩色の技法を活かそうとしたり、試してみたりしようとしている記述がある」は30人(61%)、基準C「本単元で学習した構図や彩色の技法を活かそうとしたり、試してみたりしようとしている具体的な記述がない」は9人(18%)で、2学級合わせて49人(欠席6名)中40人の約82%がB以上であった。なお、基準Cのうち2人は無記入であった。

記述例として、「私は構図をもっと伝えたいことがよくわかって、迫力が出るように考えてから絵を描きたい。暖色を使うと明るくなるから、次からはもっと暖色を使って描きたい。」や、「暖色と寒色のバランスを考えてやってみたい。動物の表情や感情によって色をかえたい。」などがあり、多くの児童が実践Ⅱの学びを、次に絵を描くときに活かしたいと考えていることが分かる。上記の結果は、基準Cの児童も「今の絵は絵の具がはみ出してしまったけど、次ははみ出ないようにきれいにかく」と書いていて、前向きな記述をしており、実践Ⅱでの構図や色の学びが、興味・関心を引き出すことに効果があったと考えられる。

ここまでの結果及び考察でみてきたように、実践Ⅱの結果、各活動の始めの時間帯に導入の工夫を設けることで、興味・関心を持ちながら活動に取り組み、下描きの際には構図の学びを活かしたり、彩色の際には寒色や暖色の学びを自分の作品にすぐに活かしたりすることができ、表現力が育成できたと考えられる。下描きの際には、全体及び正面(前)、横、後ろの角度を変えて撮った写真を見て、それぞれが与える印象を考えることで、同じ人で同じポーズでも角度や位置を変えることで、伝わる印象が違うということに気づき、児童自身の作品に活かすことができていた。同じように、彩色の際には、下絵は同じ熊であるが、寒色系と暖色系に色をわけて塗った2枚の絵の例を示し、それぞれが与える印象を考えることで、同じ下絵でも色を変えることで、伝わる印象が違うということに気づき、児童自身の作品に活かすことができていて、表現力の育成に効果があったと考えられる。実践Ⅰと比べて、実践Ⅱでは、思考力、判断力、表現力等では基準Aが10人増加、技能では基準Aが5人増加しており、表現力は実践Ⅰに比べて更に向上していると考えられる。また、基準Cについても思考力、判断力、表現力等及び技能どちらも減少しており、指導効果があったといえる。

興味・関心を引き出すことに対しては、実践Ⅰの際には基準Aが13人(25%)であったのに対し、実践Ⅱでは基準Aが10人(21%)に減少していた。基準Cも2人(3%)から9人(18%)に増加してしまった。これは構図や寒色、暖色などの色の学びについて、次に活かすことを考えるということが少し難しかったからだと考えられる。基準Cの児童も前向きな記述をしていたが、具体的に構図や色の学びの活かし方を考えることまではできなかったためだろう。

実践Ⅰでは、興味・関心は高まったものの、十分に表現力に結び付けるのが難しかったり、実践Ⅱでは、表現力は高まったものの、興味・関心について少し課題が残ったりしたことから、表現力を育成することと興味・関心を引き出すことのバランスをとり、両者が向上するように導入の工夫を行っていくことが、次の実践の課題である。

主要引用・参考文献

佐藤尚宏(2017)「子どもの意欲と創造性を引き出す図画工作の導入の考察」, 吉備国際大学研究紀要(人文:社会科学系), pp107-114